

## 柳義久講演「VHS 世界制覇の過程」について

皆さん今日は。昨年この会ではVHS 40周年記念の会ということで、明治大学大学院でVHSの歴史的な研究をしているビクターOB・柳義久さんに講演をお願いしました。そして本年1月にビクター高柳会で柳さんにもう一度さらに進んだ研究をベースに「VHS 世界制覇の過程」と題して講演をお願いしました。私としてはこの2回目の柳講演が良く出来ているので、これが、日本ビクターの歴史の重要な一部を形成する完成した「VHS ストーリー」と言いたいのですが、実は未だちょっと足りないのです。

実は先日柳さんに、私が足りないと思う不足分を話してきましたので、今日はその内容をここでお話しし、その上で、皆さんにはもう一度、次のページからこの柳講演を聞いて頂くようお願いしたいと思っています。

[柳義久講演「VHS 世界制覇の過程」](http://jvckoto.news-site.net/kannren/takayanagi/vhs_world.wmv) 又は [http://jvckoto.news-site.net/kannren/takayanagi/vhs\\_world.wmv](http://jvckoto.news-site.net/kannren/takayanagi/vhs_world.wmv)

さてこの新柳講演の最も感心させられるところは、従来からの説明言葉「VHS ベータの熾烈な競争」ではなくて「第1 第2 第3の危機を乗り越えたVHS」とすることで、そのVHS 成立の過程が具体的に明確になった点です。今日は時間の関係もあって、その第1 第2の危機については柳講演を聞いて頂くとして、第3の危機についての確認から始めたいと思います。

時はVHSのスタートした昭和51年、約40年前です。

2月 節分の日由高野当時のビデオ事業部長はVHSのスタートを宣言し、設計並びに生産準備を開始します。

既に前年の昭和50年に、ソニーの1時間ベータはスタートしていますが、VHS側は録再2時間機として、東芝、三洋を含む7社連合が結成されていて、多くの人の目には前途洋々のスタートでした。

4月になると しかしソニーはこれに対しベータの2時間モードを開発し、各社に案内をします。

これに反応して東芝、三洋の2社は直ちに一転し、ベータ陣営にくら替えします。

9月には それでも残り未だ5社はあるとして、VHSの共同発表を予定しますが、松下の同意が得られずに、これはビクターの単独発表となりました。松下幸之助相談役は一貫してVHSを支持したものの、松下経営の責任者である松下正治社長と特にビデオ担当の稲井副社長は、2Hベータを見て、VHS ベータ戦の様子見に入ったんですね。この5月には自社開発のあのドカベンと評判の悪いVX-2000を正式に全国発売を開始しています。

12月に ビクターは予定した通りにVHSの発売を開始しましたが、なんと発売寸前の12月2日の日本経済新聞には次のような記事があります。

松下電器産業の松下正治社長は、家庭用VTRの規格問題について「自社製品1本に絞り、将来も日本ビクター製品に切り替えることは考えていない」と語り、また「合理化によってVX-2000の21万円という価格をさらに引き下げることは可能であり、録画時間延長の自信もある」とも言っています。

また同新聞は「日立、シャープが相次いでビクター方式を採用した背景には、松下がいずれ追随するとの見通しがあっただけに、今回の「自社製品一本で行く」との松下首脳発言は各方面に波紋を投げそうだ」とコメントしています。

この状況下で通産省は消費者の混乱を理由に、VHSの開発費数十億のソニー負担を条件に、VHSの中止を勧告する、まさにこの状況はVHS = ビクター一人ションボリの危機だった・・・これが柳講演の第3の危機です。

皆さんはこの第3の危機を意識されていたでしょうか？

最終的な「VHSストーリー」としてはこの第3の危機に対して、高野さんは如何なる気持ちで、如何に対応したのかの説明が不可欠だと思いますので、私の考えを聞いてください。

実はここにご出席の皆さんの多くの方は、高野さんからこの第3の危機の真っ只中でどんな気持ちで臨んだか、直接に聞いていると思います。それは副社長退任時の磯子プリンスホテルでの感謝の会です。高野さんはあの有名な「夢中で・・・」の挨拶をしましたが、あの中で「私はベータに負けるなんて考えたことは一度もない」と言い切っています。危機と言われる中でも勝利の自信があったと言っています。

高野さんのこの自信が単なる空元気や空自信でないことは、VHS初年度昭和51年から昭和55年まで5年間のビデオ国内市場状況を見ればわかります。

VHSの販売シェアは4年目昭和54では未だ47%、これが5年目の昭和55年に56%とベータを追い越します。この間ずっとVHSの方が高価格で推移しながらついにベータを追い越します。

何故この時、追い越せたか、当時のビデオには次の3つの用途ありと柳講演で述べられていますが、それぞれで

- 1) タイムシフトマシン・・・長時間モードがVHS：ベータで6時間；3時間とVHSの勝利。
- 2) ソフトの再生機・・・昭和52年ソフトビジネスはVHSの11億円に対しベータは10億円と同等だが、内容的にベータIとベータIIの2モードに分かれたために、この後は殆ど全てVHSソフトの市場となる。
- 3) ポータブル・・・ソニーは昭和55年8ミリビデオを発表しベータとしては退散する。

この3大用途において完全勝利するVHSの姿こそが、まさに高野さんの当初からの自信であり、あの盆栽を育てるようにVHSを育て上げた結果と言えます。

今日私が話したかったのはここまでで後は余談です。

VHSの第3の危機の一つはソニーの2Hベータ出現ですが、もう一つは松下電器のVHSへのためらいです。この松下問題の解消について柳さんは謎と言っています。しかし私は歴史的事実を並べれば容易に推定のつく話だと思います。その鍵はRCAです。

オーラル会での塩谷卓三さんの証言ですが、高野さんはRCA社をVHSグループに取り込むために、あの3/4U-VCRポータブル機のOEM供給を開始したそうです。そのRCAの代表一行がVHS2年目、昭和52年の正月早々にビクターにやってきます。土居修治さんの証言では当日高野さんは実態以上にVHSの生産は好調だと見せるために、一度流れ終わったセットまでもう一度ライン上に並べ直して見せたそうです。ここまでしながらこの日ビクターはビジネスの話は全くせずに、そのままRCAの一行を松下送り出します。これを迎えたのは松下の責任者・松下正治社長とビデオ担当の稲井副社長、この二人が言ったことは当然、松下の方針であり、先ほどの新聞の通りと推定できます。「RCAさん、私共のVX-2000はコスト力があります、興味があれば供給します」と。それにRCAの反応は多分「このカセットではソフトの市場は成り立ちません。松下さんの子会社ビクターのVHSなら何台でも売りますよ」と。あとは映像メディアの世紀にもある通り、それから試作機のVHSを仕上げ2月にアメリカへ持ち込み、OEM契約成立ということです。このあと松下のVHS機は米国市場でベータの1300ドルに対し1000ドルを切る安値で2～3年の間にベータの販売台数を凌駕し市場を制したと、松下側はいたるところで発表しています。がこの時に導入された4時間モードの存在は、ソフトとしては大きな問題で、先ほど日本市場の場合を述べましたが、ソニーのベータにとっては1H/2H両ソフトの存在は敗北を決定的としました。

柳さんの講演によるとこの VHS4H ソフトの問題に対しては、松下ではなくビクターが極めて的確な対策を講じていたと紹介されています。これは柳さんの歴史的発見ですが、発見のきっかけは、この会の会員・小野精司さんの VHS40 周年記念のページへの投稿でした。

この歴史的発見内容についてはさらに説明をしたい処ですが、私に与えられた時間は過ぎていますので、どうかこの内容はビクター高柳会ホームページの柳講演をご覧頂くようお願いして、私の話は終わりたいと思います。なおご自宅のパソコンでご覧になれない方には、本日は DVD を用意して、平綿幹事にあずけてありますのでご利用ください。それからもう一つ。

柳さんの最終「VHS ストーリー」と最終論文は未だ完了したわけではありません。また小野さんの場合のような新たな発見の可能性もありますので、皆さんからお気づきの追加情報は是非ご提供頂くようお願いし、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

以上